

香川県

香川県森林・林業政策課 主席指導員 鴨川美和子 ※

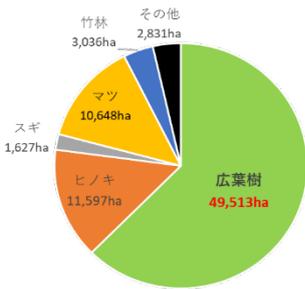
「ナラ枯れ」被害対策のための 県産広葉樹の活用の取組みⅡについて

1 テーマの趣旨・目的

本県の民有林面積約8万haのうち広葉樹林は約6万haと約6割を占め、そのほとんどがコナラ、クヌギ等の二次林で構成されている。また、そのほとんどは7齢級以上の森林で占められており、令和元年度から県内で発生しているナラ枯れ被害の拡大が懸念されている。

このため県では、ナラ枯れ被害への対策として、令和2年度に「香川県ナラ枯れ防除対策方針」を策定し、高齢

香川県民有林森林資源面積



級の広葉樹の二次林について、ナラ枯れの被害を受ける前に予防伐採や更新伐を行う等、ナラ枯れに強い森林への若返りを推進しているところである。

若返りを図るためには、同時に、伐採した材を少しでも有効活用することが重要であることから、香川県産業技術センターとともに、伐採したコナラ、アベマキ材等の乾燥試験と強度試験を行い、その結果に基づいて県内の企業等に働きかけを行っている。今回は、昨年度に引き続き、これまでの県産広葉樹の活用の取組みについて報告する。

2 現状及びこれまでの取組の成果・課題

(1) 現状

令和3年度は、サンプル材を製作、県内の木工関連事業者などに配布して、広葉樹材の需要の掘り起こしを行った結果、ウッドショックの影響で、広葉樹材の輸入が、不安定になった時期でもあり、原材料の問題に直面していた事業者からたくさんの引き合いがあった。

しかし、材の品質面での要望が厳しかったことや、価

格面で山側と折り合いが着かず、実際の取引は2件と十分な成果をあげることができなかった。特に、価格面での折り合いがつかないことが多く、良材が、チップ材と同じ価格で交渉されるなど、山側と川下側の事業者との間に大きな意識のギャップがあることを認識した。

(2) 取組内容

このため令和4年度は、まず、関係者間で県産広葉樹の現状や特性について、認識を共有することを目標とし、山側が広葉樹を出そうとすれば、相応の労力と時間がかかること、材としての特性、長所や欠点など、時間をかけて説明することとした。

その新しい試みの一つとして、森林組合が伐採することが決定していた香川県善通寺市内の広葉樹林を対象に、試験的に「立木リスト」を作成し、伐採前に、立木の情報を川下の事業者へ提供した。かつ、買い手の不安を少しでも解消するため、注文を受けて伐採した材を山土場に仮置きし、山側と川下側との信頼性の確保に努めることとした。

香川県善通寺市での毎木調査の結果 令和5年3月

樹種	本数	平均胸高直径	平均樹高	通直部	材積
アベマキ	92本	27cm	12m	3m	21m3
アラカシ	13本	30cm	13m	3m	3m3
エノキ	2本	38cm	15m	3m	1m3
クロガネモチ	4本	37cm	15m	4m	2m3
センダン	5本	35cm	13m	3m	2m3



(様式2)

また、県内の主要な林業関係者と県産広葉樹に関心のある川下の事業者を対象に講演会（講師：神戸大学名誉教授 黒田慶子氏）を開催、同じ会場でワークショップ形式の意見交換会等を行った。会場内には、これまで県産広葉樹を使って製作した家具等を展示し、実際の製品を見ながら、山側の参加者と交流できる場を設け、交流を深めることができた。

(3) 成果

このような取組みの結果、広葉樹に関心のある、いわゆる「広葉樹関係人口」が増えるとともに、1月以降、講演会をきっかけにして、その参加者同士で活発に材の取引が行われるようになった。

一番の大きな成果は、県内各地で広葉樹材が用材として、適正な価格で流通し始めたことである。取引された材積はまだ集計中であるが、約 50 m³が家具材として製材され、現在、天然乾燥が行われている。



もう一つの大きな成果は、関係者同士が独自で交流するなど、民間レベルで県産広葉樹を活用する活発な動きが生まれたことである。

香川県家具商工業組合の地産地消プロジェクト、



「100% Made in Sanuki Project」は、「WOOD コレクション (モクコレ) 2023」に出展する等、活発に活動するとともに、積極的に山側との材の供給ルートを開拓している。

また、若手木工家と林業家がコラボし、有害鳥獣捕獲で捕獲されたイノシシの皮とアベマキ材を、県内の伝統工芸の技術も合わせて開発された新製品、「五名里山スツール」が販売されている。

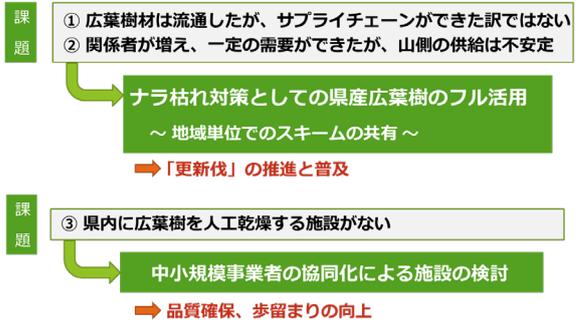
(4) 課題

しかし、このような成功事例がある一方で、しっかり

したサプライチェーンは未完成で、県産広葉樹材のストックも十分ではない。伐採面積も少なく、当初の目標であった「ナラ枯れ対策」としての効果にも限界がある。加えて、川下側の、一定の需要にもかかわらず、山側の供給は不安定である等、川下の需要に計画的に応じることができないにはまだまだ時間が必要である。

また、広葉樹の人工乾燥は、ヒノキ材の人工乾燥の空いた時間で行われている状況であり、広葉樹専門の人工乾燥の施設の設置が課題となっている。

3 今後取組むべき内容



最も重要な課題は、山側からの供給が不安定であることと認識している。このため今年度は、「ナラ枯れ対策としての県産広葉樹のフル活用」をテーマとして、普及活動を行うこととしている。

市町を単位として、そこで活動する林業研究会や林業家、シイタケ生産農家、素材生産業者や森林組合を対象に、広葉樹に関する地域協議会、集会を開催し、小さな単位で意識を共有していきたい。地域での取組みを一層支援するため、今年度は、ナラ枯れ対策としての更新伐を技術指導し、採択基準を見直して、造林事業の補助対象としても支援する予定である。

また、もう一つの課題である人工乾燥については、産業技術センターと連携し、継続して人工乾燥プログラムの完成度を高めるとともに、例えば、小規模な乾燥施設について、複数の事業者が協同して設置ができるような方策を検討するなど、情報収集を行って行きたいと考えている。

※ 香川県東部林業事務所 主席指導員 高橋新二
香川県西部林業事務所 主席指導員 大見直弥